

1986年4月25日発行

39号



中村 哲・尚子

Dr. Tetsu NAKAMURA
C/o Mission Hospital Peshawar
Peshawar, N.W.F.P.
PAKISTAN

念願の靴のワークショップが四月にオープンしました！

これで“うらきず”に悩まされる患者がどんなに減るのかと思えば愉快の一語に尽きます。ここに至るまでどんなに大きな努力と資金がつかまされてきたことでしょう。まことにこれは、多くの人々の文字通りの好意の結晶でして、近年の Mission Hospital にとっても、J O C S にとっても一つの金字塔だと言っても誇大ではありません。

これはわれ等ら、J O C S の仕事の、最近の傑作の一つだとひそかに自負しております。北西辺境州のみで推定 2,000 名以上の、足底潰瘍の可能性のある患者の社会生活が脅されるのが少なくなることを思えば、派遣決定以来のいさこぎや苦勞をうけして余りあるものがあります。

「靴のワークショップ」くらいで……と思われる方もあるかも知れませんが、少しでも、らの仕事にたずさわったことのある人なら、足の感覚障害からくる「足底潰瘍」がいかに患者の社会生活の脅威になるか、おわかりいただけるでしょう。また、この治療にいかにか大な薬品、ギプス等々の費用がつかまれるか、そして、その努力にもかかわらずいかに困難なものか想像をこえるものがあります。結局、その予防が最も重要なのです。（もちろんこれは、うらきず防止のための教育と併行しておこなわれます。）

この計画は、私が最初にこの病棟にやってきた時からの意願でした。北部・西部の山岳地帯からやってくる足の変形患者をみたとき、ま、さきに頭に浮かんだのはあのごつごつした岩石砂漠の山道でした。きりたった鋭い石ころと急な坂道、狭い農耕地、たきぎで料理する村人の生活等々、感覚のない手足には危険がいっぱいです。そこで着任と同時に、私は良いはきものを与える計画を立てていました。とすれば、昔トレッカーとしてナトラルやフンザ等の北部の山々を歩き回っていたのも無駄ではありませんでした。

伝統的な生活習慣に固執する北西部の住民の習性をよく知っていたのも、靴のデザインを決める際によく参考になりました。靴が機能的にいかに優秀であっても、伝統社会にうけいれられなければ役にたたないからです。